

ニューマンの大学の理念にみる人格的影響

長 倉 禮 子

山梨県立女子短期大学 国際教養科

Personal Influence in J. H. Newman's Idea of a University

Reiko NAGAKURA

Yamanashi Women's Junior College

Department of International Studies

University can be described in its essence as a place for the communication and circulation of thought, by means of personal intercourse, through wide extent of countries. To know what a University is, in its elementary idea, we have to go back to the origin of European civilization, Athens. The Athenian schools had drawn the youths of the Western World for a thousand years. And the Athenian method of education was not the method of rule, but that of influence, which was the action of personality, the intercourse of soul with soul, the play of mind upon mind, and it was an admirable spontaneous force.

key words: personal influence (人格的影響), liberal education (人文教育), mutual education (相互教育)

はじめに

アイルランドの司教団は1851年11月12日に、ローマ・カトリック教会へ帰依して日もまだ浅いニューマンをダブリンに創設しようとしていたカトリック大学の総長の職に任命した。ニューマンの名は既に英国国教会の説教者としても、オクスフォード運動の精神的指導者としても英国国内に広く知れわたっていただけに、彼のカトリックへの帰依は英国社会に非常に大きな衝撃を与えたのであった。それと同時に、彼の帰依はそれまで英国において低く見られていたカトリック教会と信徒の社会的地位の向上にも少なからぬ影響を及ぼしたのであったから、アイルランドの司教団がニューマンのカトリック大学の総長としての任に大きな期待を寄せたのもまた当然であった。周知のように、19世紀の英国では中産市民階級が勃興し、知識・教養に対する一般市民の要求は増大し、それとともに教養は社会的地位を得るための功利的手段ともなっていた。このような時代の趨勢下にあつて、カトリック信者は人口の大部分を占めていたにもかかわらず、社会的には不利な状況に立たされていたアイルランドで、カトリック信者にもプロテスタント信者と同等な高等教育の機会を与えるにはカトリック大学の設立が急務だという考えが興ってきていたのであった。

ニューマンはロンドンの銀行家の息子として中産階級に生れ、オクスフォードの大学では伝統的な人文教育 (Liberal Education) を受けた。ニューマンはオクスフォードにいたときから大学はどうあるべきかを深く考えてきた人であるが、彼は研究機関としての大学と人間性を高める教育の場としての大学とは区別して考えていた。彼は人格形成の場としての大学は人文ないし古典教育を中心とした Liberal Education であるべきことを主張するが、この Liberal Education とキリスト教的人格形成とをどのように結び付けたいかを常に考えていたことはいうまでもない。しかし、高等教育に対する彼の理想と改革への情熱は理解されなかったばかりか、彼に反対し続けたのは他でもない彼を招いた司教たちで

あった。ダブリンの主坐大司教(後の枢機卿)ポール・カレン(Paul Cullen)はローマにあるアイルランド神学校の元校長で、豊かな学殖と熱心な信仰の持ち主ではあったが、彼自身大学の経験はなく、大学についてのニューマンの考えは彼にはあまりに世俗の学問を強調しすぎたと思われた。そのうえ他の誤解も手伝って、結局彼は英国教会からの転会者ニューマンを信用することができなかったのである⁽¹⁾。

ニューマンが総長職に留まったのは僅か7年間であり、しかもそれは失敗と挫折の連続であったという。とはいえ、ニューマンはこの7年間に教育の高邁な理念を語る古典的名著 *The Idea of a University* と、大学本来の目的がどうあるべきかを歴史的に説き明かした *The Office and Work of Universities* を残したのである。*The Idea of a University* は、1852年ニューマンが総長に就任するに先立って行なった大学教育の目的と性質に関する9回の連続講演と総長在任中に行なった特別講義とエッセイからなるものである。ニューマンの教育論は人文教育ないしは古典教育を中心とした Liberal Education とキリスト教的人格形成との統合を目指しており、西欧キリスト教文明の伝統を踏襲するものであるが、教育の本来の目的、その原理と理想を述べた大学教育の理念の精髓を表わす普遍性のある教育論として高く評価され、今では教育論の古典とされている⁽²⁾。ここでニューマンが大学本来の目的としているのは、多くの知識を習得することではなく知性を涵養することである。知識は一つの統一体であるから、各人はそれぞれの分野の知識の相互関係を見つけ、その全体における位置を自ら判断しなければならないし、また、何かに役立つから知識を求めるのではなく、知識は知識それ自体のために追求されなければならない。学生は講義を受けることによって知識を増すということではなく、自ら積極的に知識の全体における秩序と関連性、そして普遍性を求めなくてはならないと主張するのである。

1854年6月1日にニューマンは大学の機関紙 *Catholic University Gazette* を創刊し、(総長に正式に就任したのは1854年6月3日であるのでその2日前である)同年12月28日の第31号までは彼自身が、翌1855年1月4日の32号からは友人で古典文学教授のオーズビー(Ornsby)が編集・発行を担当した。(1855年3月8日までは週刊、それ以後同年12月6日までは月刊)タイトルなしで掲載された論説はニューマンの筆によるものであるが、1856年11月にはそれらが *The Office and Work of Universities* と題して出版された。これは1870年から1907年まで版を重ねたが、1872年には3巻から成る *Historical Sketches* (Longmans, Green, and Co., London) の第3巻に‘Rise and Progress of Universities’⁽³⁾と題して納められた。(1902年には *University Sketches* のタイトルで Walter Scott Publishing Co. の Scott Library としても出版されている。) *The Office and Work of Universities* から‘Rise and Progress of Universities’へとタイトルが変わったのは、論説を書き進めていくうちに歴史的側面をより強調するようになっていったためと思われる。しかし一読すれば分かるように、ニューマンは大学の歴史をいわゆる現代的感覚で言う「科学的」に書いたのではなかった⁽³⁾。それよりも、大学の起源を辿ることによって、アテネから発した西欧における高等教育がニューマンの時代まで連綿として続いていることを解明し、大学というものが本来どうあるべきかという理念を明らかにしようという狙いがあったのである。

先にも触れたように、ニューマンの教育論は、人文教育とキリスト教的人格形成との統一を目指すものであるが、その教育理念の基礎には人格論⁽⁴⁾があり、人格的影響もまた重要な要素となっている。ニューマンによれば、大学は歴史によって形成されたいわば歴史の産物であり、アテネのアカデメイアがその原型である。実際、大学の起源を辿っていくと、あらゆる地方から普遍的な学びの場である大学に集まってきた学生たちは、知的雰囲気溢れる共同体において、教授と学生の、また学生同志の人格的な触れ合いのなかで切磋琢磨して学問を進展させてきたのである。*Historical Sketches* 第3巻の‘Rise and Progress of Universities’にはそうした大学の発生と発展の状況が臨場感に溢れて生き生きと描かれている。本稿は、このテキストを追いながら、ニューマンの大学の理念の中で、人格的影響(personal influence)がどのようなものとしてとらえられ位置づけられているかを明らかにしようとするものである。

1. 普遍的な学びの場 (Studium Generale)

学術の研究及び教育の最高機関として今日我々が「大学」(University)と称しているところは、その西欧世界における発生において Studium Generale と呼ばれていたところがそれに当たる。「普遍的な学びの場」(School of Universal Learning)とでも訳せるであろうこの言葉は、「あらゆる地方から」、「あらゆる分野の」知識を探究する教師と学生とが、「ひとつの場所へ」集まってきたということを意味しているとニューマンは言う⁽⁵⁾。従って、最も基本的には、大学とはあらゆる地方から集まってきた教師と学生とからなる集団で、あらゆる分野の知識を探究し学ぶ場である。このことから、大学はその本質において、広域に互る地方からの人々の集まりであり、集まった人々が人格的に交ることによって知識・思想を交流し合い、伝達し合う場と言える。勿論、人格的な交り、知識や思想の伝達が行なわれるのは何も大学に限られているわけではなく、このような交流は人間の本性に基づくもので、人間社会において絶えず行われている普遍的な現象である。一つの世代はそれに続く次の世代の一人一人に絶えず働きかけているし、人間同志の相互教育、人間相互の作用・反作用の働きかけは人間社会において自然に行われているのである⁽⁶⁾。また人と人とが会って知識・思想・意見等を交換することは学問の進展のために必須であり、学会や様々な学術的な集会に参加するときなど自分自身の知性が磨かれ拡大されるのを経験し、学問への刺激を受ける。しかし、そのような会合は大学の理念の一部を表すに過ぎないのである⁽⁷⁾。

人間の相互教育 (mutual education) は、はっきりとした目的をもって行なわれる場合もあれば、そうでなく自然に行われる場合もある。そしてその方法には概して二つがあるとニューマンは言う。一つは書き言葉 (litera scripta) による知識・思想の伝達であり、もう一つは口頭による教育 (oral instruction) である⁽⁸⁾。書き言葉による教育の典型はもちろん書物によるものである。書物は真理の記録であり、理性に訴える権威あるものであり、教えるための一手段でもある。しかし、多岐にわたりまた複雑化している各分野の知識について、もしそれらを正確に、また満足の行く程度にまで得たいならば、生きている人間に直接接してその肉声に耳を傾けるにしくはないのである。また、語学を学びたい人はその言葉が実際話されている場所へ行こうとしたり、芸術を学びたい人は立派な師に付こうとするが、それは人間に直接接して学ぼうとすることで、源泉そのものに行くことに他ならない。弟子と師の出会いの場では、師の人格的影響 (personal influence) と学ぼうとする弟子の謙虚な姿勢 (humble initiation) が共鳴しあってそこには互いを結びつける純粋な絆が生じるのである⁽⁹⁾。確かに書物によって思想が広く全世界にまで到達することは可能であるが、その充実な伝達は生きている人間との生きた接触によってのみ達成できる。書物は質問の細かいすべての点にまで答えてくれることは出来ないし、話し手の目・顔付き・言葉のアクセントや微妙なニュアンスなどを通じて心に語りかけるその人独自の精神やデリケートな特長などを伝えることも出来ないからである⁽¹⁰⁾。生きている人間と出会うとき、相手の顔の表情の変化や声の調子から、相手の心のなかの喜び、悲しみ、恐れ、愛、憎しみなどが伝わってくるのを我々は経験する。そのとき我々は相手の顔を見、声を聞いているのだが、顔や声は単なる手段に過ぎず、我々が実際に伝達または受け取っているのは目には見えないその人の感情や思想であり、ある意味ではその人自身とも言える。このとき顔や声が感覚にたいして働きかけているのではなく、精神または魂が直接相手の精神と魂に語りかけているのである。相手の考えや思想はどのようにして伝わってくるのかについて我々はあまり考えないし、実際のところその過程は殆ど分からない。それにもかかわらず、確かに精神は精神に、魂は魂に、目には見えぬ意識にものぼらない個々の人格に、不完全ではあっても直接語りかけるのを我々は直感的に経験するのである⁽¹¹⁾。紙に書かれた文字と生きている人間に接することとのこうした違いをニューマンは次のように言っている。

Half the symbolism of a living language is thus lost, when it is committed to paper ; and that symbolism is the very means by which the forces of the hearer's mind can be best economized or

most pleasantly excited. The lecture, on the other hand, as delivered, possesses all these instrument to win, and hold, and harmonize attention ; and above all, it imparts to the whole teaching a human character, which the printed book can never supply. The Professor is the science or subject, vitalized and humanized in the student's presence.⁽¹²⁾

換言すれば、口頭による教育 (oral instruction) は、書物による学習からだけでは決して得られない人格と人格との生き生きとした出会いによる生きた伝達を可能にし、人と人とを結びつける絆を生み出すのである。書物の源泉である人がそこにおり、その人を求めて人々が集まり、人と人との人格的出会いがある時、そこには人と人とを結びつける謂ば一つの世界とも言うべきものが自然に生まれて教育が自然に行われ、その場所是一種の巡礼地のようなものとして人々を惹きつける中心地となっていくのである⁽¹³⁾。幾多の労苦を乗り越えて、書物や知恵の源泉である人間そのものとの出会いを求めて遙か遠くまで出かけて行く若者の姿を、ニューマンは本当に良い品物を手に入れるためにはどんな労苦をもちとわず、何処にでも出かけて行く商人の姿に例えている⁽¹⁴⁾。

以上のようなことから、知性の座 (seat of wisdom) であり知的交流の場 (concourse) であり普遍的な学びの場である大学というところはどういう“場”なのか、どういう“場”であるべきなのかをニューマンは次のように結論づけるのである⁽¹⁵⁾。

A University is a place of concourse, whither students come from every quarter for every kind of knowledge.

It is the place to which a thousand schools make contributions ; in which the intellect may safely range and speculate, sure to find its equal in some antagonist activity, and its judge in the tribunal of truth.

It is a place where inquiry is pushed forward, and discoveries verified and perfected, and rashness rendered innocuous, and error exposed, by the collision of mind with mind, and knowledge with knowledge.

It is the place where the professor becomes eloquent, and is a missionary and a preacher, displaying his science in its most complete and most winning form, pouring it forth with the zeal of enthusiasm, and lighting up his own love of it in the breasts of his hearers.

It is a place which wins the admiration of the young by its celebrity, kindles the affections of the middle-aged by its beauty, and rivets the fidelity of the old by its associations.

It is a seat of wisdom, a light of the world, a minister of the faith, an Alma Mater of the rising generation.

2. アテネにおける大学と人格的影響

大学というものを考えるとき、何よりも先ずヨーロッパ文学の故郷であり、ヨーロッパ文明の源泉であり、さらに西欧における「大学」の発祥の地であるアテネを考えないわけにはいかない。ヨーロッパ大陸の東端にあって、地理的には知識のメトロポリス的な役割⁽¹⁶⁾を果たせるとは思えなかったアテネが、数世紀にわたって西欧の学問の中心として若者たちを惹きつけていたのは何故であろうか。「普遍的

な学びの場」として、大学が設立される位置や環境の重要性はニューマンの強く主張するところである⁽¹⁷⁾。その観点から見れば確かにアテネは天然の美しさを具えていたし、既に高度に完成された芸術・文化を誇る都市であったから、人々はアテネの文化・文明に惹かれて集まってきたことも考えられる。若者はそのような環境に生活するだけで豊かな人間性を養い、高い教養を身に付け得たであろうからである。しかし実際はそうしたことは寧ろ二の次であって、大変な難儀に堪えて時に命懸けで、はるばるアテネにやって来た若者たちの第一の目的は知恵 (wisdom) を得ることであり、そこで人間、とりわけ「偉大な師」に出会うことであったことをニューマンは数々の例を挙げて強調しているのである。

Hither, then, as to a sort of ideal land, where all archetypes of the great and the fair were found in substantial being, and all departments of truth explored, and all diversities of intellectual power exhibited, where taste and philosophy were majestically enthroned as in a royal court, where there was no sovereignty but that of mind, and no nobility but that of genius, where professors were rulers, and princes did homage, hither flocked continually from the very corners of the *orbis terrarum*, the many-tongued generation, just rising, or just risen into manhood, in order to gain wisdom.⁽¹⁸⁾

アテネに集まって来たのは卑しい身分のものから高貴な身分のものまで、年令も職業も異なり、多種多様な興味をもった様々な地方の出身者であった。彼らはほんの僅かなものだけを携えてやって来た。アテネに着いてからも生活の費や授業料を払うために苛酷な労働に従事しなければならない人や、非常に貧しいところに住まわなければならない人も多かった。しかし、彼らに共通していたのは、他では見たり聞いたりすることのできないものをその目で見、その耳で聞きたいということであった⁽¹⁹⁾。つまり、アテネが若者たちを惹きつけたのは、その自然の美でもなければ文化でもなく、そうしたものの源泉、偉大なる人間の存在そのものであったのである。ニューマンは、アテネにやってくる若者たちの姿を想像力たくましく、また臨場感に溢れて生き生きと描いている。以下に一例を引用しよう。

So now let us fancy our Sythian, or Armenian, or African, or Italian, or Gallic student, after tossing on the Saronic waves, which would be his more ordinary course to Athens, at last casting anchor at Piraeus. He is of any condition or rank of life you please, and may be made to order, from a prince to a peasant. Perhaps he is some Cleanthes, who has been a boxer in the public games. How did it ever cross his brain to betake himself to Athens in search of wisdom? or, if ever touch his heart? But so it was, to Athens he came with three drachms in his girdle, and he got his livelihood by drawing water, carrying loads, and the like servile occupations. He attached himself, of all philosophers, to Zeno the Stoic, —to Zeno, the most high-minded, the most haughty of speculators; and out of his daily earnings the poor scholar brought his master the daily sum of an obolus, in payment for attending his lectures.⁽²⁰⁾

アテネに来た若者たちは偉大なる人物に会うことによって大きな影響を受けたのであるが、その言葉を聞く以前、つまりその人の「存在そのもの」に接しただけで影響を受けたのであった。ニューマンは更に続けてある若者のプラトンとの出会いの情景を劇的に描く。

Onwards he proceeds still; and now he has come to that still more celebrated Academe, which has bestowed its own name on Universities down to this day; and there he sees a sight which will be graven on his memory till he dies. Many are the beauties of the place, the groves, and the statues, and the temple, and the stream of the Cephissus flowing by; many are the lessons

which will be taught him day after day by teacher or by companion ; but his eye is just now arrested by one object ; it is the very presence of Plato.⁽²¹⁾

偉大な師に出会うということは、その人の話を聞くとか教えを乞うとかということとは別で、その人の存在そのものが彼にとって重要で、ときにその出会いはその人の生涯に決定的な意味をさえもつものである。

He does not hear to a word that he says ; he does not care to hear ; he asks neither for discourse nor disputation ; what he sees is a whole, complete in itself, not to be increased by addition, and greater than anything else. It will be a point in the history of his life ; a stay for his memory to rest on, a burning thought in his heart, a bond of union with men of like mind, ever afterwards.⁽²²⁾

Had our young stranger got nothing by his voyage but the sight of the breathing and moving Plato, had he entered no lecture-room to hear, no gymnasium to converse, he had got some measure of education, and something to tell of to his grandchildren.⁽²³⁾

その人格の中に結集されている一切が今見ている目の前にあり、その目には見えない精神が不思議な魅力をもって自分の精神に迫り、自分の心を彼のほうに引き寄せる。これが生ける人間による「人格的な影響」(personal influence) ともいうべきものである。人間はその本性からして他の人の人格的な影響を受けるように促されているのであるが⁽²⁴⁾、出会いそのものによって、既にある程度の教育というものが行なわれているとニューマンは主張するのである。

3. 知識への渴望と人格的影響

何かの外面的な要求や欲求を満たすためではなく、自らの向上を求めるという内発的な動機にかられて多くの若者たちが集まってきたことから大学は生れてきたのである。そして、若者たちの知識に対する渴望(thirst for knowledge)が、如何なる外的な不自由さをも乗り越えさせ、大学を生かす基本的な原理として大学に生命を与え続けてきたのである。教師たちの優れた知性および知識と一致した人格が若者たちを惹きつけたのであり、若者たちは自由な精神をもってひたすら知識への渴望から師のもとに集まってきて、その弟子となったのであった。

....both in Athens and in Rome, we find it(the thirst for knowledge) pushing forward, in independence of the civil power. The professors of literature seated themselves in Athens without the favour of the government ; and they opened their mission in Rome in spite of its state traditions. It was the rising generation, it was the mind of youth unfettered by the conventional ideas of the ruling politics which in either instance became their followers.⁽²⁵⁾

ニューマンは、師のもとに集まってくる若者たちの姿をいくつか描いているが、プラトンの『対話編』に出てくるプロタゴラスの例を紹介しよう。

They flocked to him, be it observed, not because he promised the entertainment or novelty, such as the theatre might promise, and a people proverbially fickle and curious might exact ; nor, on the other hand, had he any definite recompense to hold out, — a degree, for instance, or a

snug fellowship, or an India writership, or a place in the civil service. He offered them just the sort of inducement, which carries off a man now to a conveyancer, or a medical practitioner, or an engineer, —he engaged to prepare them for the line of life which they had chosen as thier own, and to prepare them better than Hippias⁽²⁶⁾ or Prodicus,⁽²⁷⁾ who were at Athens with him. Whether he was really able to do this, is another thing altogether; or rather it makes the argument stronger, if he were unable; for, if the very promise of knowledge was so potent a spell, what would have been its real possession? ⁽²⁸⁾

時代の趨勢におもねるのではなく、世俗的な欲望からでもなく、純粹に知を求めて教室を埋めている若者たちに、教師は講義や会話を通して優れた知識をその人格とともども与えたのであった⁽²⁹⁾。時には若さのなせる無礼講さえ許し、いうなれば教育愛が若者の率直さと無礼をそのままに受け入れさせたのであった⁽³⁰⁾。教育においては、いわゆる“demand”のまゝに“supply”——教師の人格と一つになった優れた知識——がなければならず、教師の優れた知性そのものが知識の供給手段なのである。

ニューマンはアテネが世界に冠たる教育の府となったのは、規律や制度や組織や、はたまた「教室・講義室」などではなかったことを強調する。大学が大学として成立するためには、先ず、教える職業（profession of teaching）と学びたい欲求（desire for learning）を持つ人々とがなければならない。そして、この「学びたい欲求」「demand」と「教える職業」「supply」とが常にあったが為に大学は生れ、この両者の間に生じる知識の交流と、人間と人間とを結びつける絆こそが大学を存続させ発展させてきたのである。

In all times there have been Universities; and in all times they have flourished by means of this profession of teaching and this desire of learning. They have needed nothing else but this for thier existence. Teachers have set up their tent, and opened their school, and students and disciples have flocked around them, in spite of the want of every advantage, or even of the presence of every conceivable discouragement.⁽³¹⁾

とは言え、ニューマンは才能や勉学の成果をはじめ、評価・尊敬・報酬・財力・権威などといった外的要素を決して軽んじているわけではない。しかし、大学をその本質から考えるとき、どうしても「知性」が優先しなければならず、大学発展の歴史からみても、上記のような外的要素は手段としてあるいは結果として付随してきたものに過ぎないことを、“First intellect”とか“Mind first”とかいう言葉を繰り返し使って強調している⁽³²⁾。そして教師はただ教えるだけではなく、説教者や宣教師と同じように、聞いているものの心を燃え立たせる者でなければならないのである。教えるものと教えられるものとの間に生じる知的な交流と人間的な絆は大学を生かす命であり、それをニューマンは‘moral attraction’と呼ぶ。そして、もしこのような絆がすべてに先行しないようなところならば、それは大学の本質を失った名ばかりの大学に過ぎないのである。

Its constituting, animating principle is this moral attraction of one class of persons to another; which is prior in its nature, any commonly in its history, to any other tie whatever; so that, where this is wanting, a University is alive only in name, and has lost its ture essence, whatever be the advantages, whether of position or of affluence, with which the civil power or private benefactors contrive to encircle it.⁽³³⁾

4. 組織と人格的影響

今日の我が国におけるいくつかの大学にも同様のことが言えるだろうが、アテネにおける大学とは異なり、ニューマンの時代、学問の府といわれていたところで、教師と学生との間の垣根は高く堅固で、教師は学生たちを理解しようとはせず一方通行で、彼らとの交流を拒み、人格的な影響を与えることなど論外と言える冷たく恩着せがましい態度をとっていた教師たちが少なからずいたことをニューマンは嘆いている。そして、そのような大学の状態を“*This was the reign of Law without Influence, System without Personality.*”と言い切っている⁽³⁴⁾。知識への限りないあこがれと期待をもって集まってきた若者たちが、もし人格的影響を与える師に出会えないとすれば、彼らはまさに牧者のいない羊たちのようなものである⁽³⁵⁾。彼らが長じて教師の立場に立った時、自分が学生時代に人格的な関わりを与えられなかったことから、規則と影響との二つを何とか一致させようと努めるであろうが、生徒たちが自分に執着することを要求するようになる場合のあることをもニューマンは指摘する⁽³⁶⁾。

ところで、人格的影響だけで大学は存続できないことは当然であるが、どんなに偉大な人も人間である限り歴史の舞台から去っていくものであるし個人は交代するものである。従って、個人的な活動の上に、更に組織というものが加えられることが必要となってくる。人間社会の成立の歴史をニューマンは、“*it begins in the poet, and ends in the policeman.*”⁽³⁷⁾と皮肉とも思える言葉で表しているが、poetは人間共同体を生かす自由な精神のようなもので‘influence’を、policemanは全体の福利のための規則・秩序‘law’を表すのであろうか。大学もまた人間の共同体として同様な道を辿ったのである。

[Universities] begin in Influence, they end in System. At first, whatever good they may have done, has been the work of persons, of personal exertions; of faith in persons, of personal attachments. Their Professors have been a sort of preachers and missionaries. and have not only taught, but have won over or inflamed their hearers. As time has gone on, it has been found out that personal influence does not last for ever; ... Accordingly, system has of necessity been superadded to individual action; a University has been embodied in a constitution, it has exerted authority, it has been protected by rights and privileges, it has enforced discipline, it has developed itself into Colleges, and has admitted Monasteries into its territory.⁽³⁸⁾

続く文章の中で、大学をその発生の歴史から見たとき、熱意と人格的な影響が何よりも先行したことを“*Zeal began, power and wisdom completed: private enterprise came first, national or governmental recognition followed; ...*”と繰り返し強調しているのである⁽³⁹⁾。

ニューマンは大学の福利・保全のためには、法・秩序・宗教⁽⁴⁰⁾も必要であり、組織や規則・規律も無くてはならないもので、これらは互いに補い合うものであるとする。だが、人格的影響があくまでも大学の“生命”である。人格的影響に組織は不要であるのに対し、もし、組織を“生かす命”である人格的影響がないならば、大学は冷たく固く石化したものになってしまうであろう。次のことばは大学の本質をあらわす簡にして要を得た名言ではなかろうか。

With influence there is life, without it there is none; if influence is deprived of its due position, it will not by those means be got rid of, it will only break out irregularly, dangerously. An academical system without the personal influence of teachers upon pupils, is an arctic winter; it will create an ice-bound, petrified, cast-iron University, and nothing else.⁽⁴¹⁾

5. 人格的影響：教育の原理

知性と自由意志は人間の基本的な本性であることは言を俟たないが、ニューマンは更に、すべての人に備わっている良心 (conscience) は人間行動の規範を示す内的な監視者 (monitor) であり、この良心は人間を超えた外的な権威が存在することを証明するものであるとする⁽⁴²⁾。人間社会においては、社会がスムーズに機能するためには、個人の良心に代わって行動の基準を示すものは法 (law) である。また人々に害を与えるかどうか、役に立つかどうかということが善悪の判断の基準となる場合がある。これをニューマンは便宜主義 (expediency) と呼び、良心の代用であるとする⁽⁴³⁾。次いで、もっと洗練された性格をもった良心の代用は美 (beauty) の原理であり⁽⁴⁴⁾、この考えによれば美と美徳は同じこと (the beautiful and the virtuous mean the same thing) である。ニューマンが良心を人間行動の厳然たる規範とするのに反して、良心に代って人間行動をもっともらしく規定するところの原理は上に述べた法、便宜主義、美の三つで、そのうちギリシャ人が人間をして完全な人間とさせる原理であるとしたのは、最後にあげた美の原理 (the principle of beauty) であったとする。

... a fine taste, an exquisite sense of the decorous, the graceful, and the appropriate, this is to be our true guide for ordering our mind and our conduct, and bringing the whole man into shape. These are great sophisms, it is plain ; for, true though it be, that virtue is always expedient, always fair, it does not therefore follow that every thing, which is expedient, and every thing which is fair, is virtuous.⁽⁴⁵⁾

美の原理に基いた理想の人間をギリシャ人はκαλοκαγαθόςつまり「紳士」(gentleman) と呼んだのである⁽⁴⁶⁾。美の原理に基いた高度に洗練された精神文化を誇っていたアテネはそのままに「大学」(ready-made University)の役割を果たしていたのであり、若者はアテネの人々のなかに暮すだけで既に知性の啓発 (cultivation of mind) がそのままに行なわれていたとニューマンは言う。そして、アテネにおける精神と思想の自由・平等が政治組織にも影響を与え、如何にヨーロッパ全体の文明として広まっていったかを次のように述べている。

Let us take her as she was, and I say, that a people so speculative, so imaginative, who throve upon mental activity as other races upon mental repose, and to whom it came as natural to think, as to a barbarian to smoke or to sleep, such a people were in a true sense born teachers, and merely to live among them was a cultivation of mind. Hence they took their place in this capacity forthwith, from the time that they emancipated themselves from the aristocratic families, with which their history opens. We talk of the “republic of letters,” because thought is free, and minds of whatever rank in life are on a level. The Athenians felt that a democracy was but the political expression of an intellectual isonomy, and, when they had obtained it, and taken the Beautiful for their Sovereign, instead of king or tyrant, they came forth as the civilizers, not of Greece only, but of the European world.⁽⁴⁷⁾

アテネの人々が正しいことを行なったのは、義務の観念からでもなく、目に見えない神に対する畏れからでもなく、そうすることが本当に楽しいことであったからにはかならない。政治的にも彼らを拘束するものは善意と寛大な精神だけであった。

They were loyal citizens, active, hardy, brave, munificent, from their very love of what was

high, and because the virtuous was the enjoyable, and the enjoyable was the virtuous. They regulated themselves by music, and so danced through life.⁽⁴⁸⁾

しかしながら、アテネの人々は法を無視していたわけではなかった。彼らの優れて繊細な趣向と名誉の感覚、そして高められた品性ある精神がおのずと自分たちの行動に影響をあたえるのだということを誇りとしていたのである。ニューマンはこうしたアテネの人々の人類に与えた人文学的・哲学的影響について、profession of philosophical democracy, originality, refinement in ideas, grace, freedom, nobleness, liberality of daily lifeなどの言葉を使って賛辞を惜しまない⁽⁴⁹⁾。

これまでヨーロッパにおける大学の発祥の地アテネにおける教育の原点が、ローマのように組織・機構などではなく、人間と人間の出会い、心と心の、また精神と精神の自由な交流、つまり「人格的影響」そのものにあったというニューマンの主張を見てきたが、次の言葉は彼の主張を簡潔に表わすものである。

Oserve, I am all along directing attention, not to the mental gifts of Athens, which belonged to her nature, but to what is separable from her, her method and her instruments. I repeat, that, contrariwise to Rome, it was the method of Influence: it was the absence of rule, it was the action of personality, the intercourse of soul with soul, the play of mind upon mind, it was an admirable spontaneous force, which kept the schools of Athens going, and made the pulses of foreign intellects keep time with hers.⁽⁵⁰⁾

だが、ニューマンは単なる理想主義者ではなかった。“In this world no one rules by mere love; if you are but amiable, you are no hero; to be powerful, you must be strong, and to have dominion you must have a genius for organizing.”⁽⁵¹⁾と言う。教育の理想を存続させるためには機構・組織も必要である。実際、古代ローマは機構・組織の才能があったが為に、ニューマンの言葉によれば「感情や幻想によってではなく」⁽⁵²⁾、政治的英知と法の力によってヨーロッパを一つにまとめた。それにたいしてアテネは、あらゆる高尚なものを持ちながら組織力がなかったために政治的には失敗したし、知性の府としてふさわしい多くの賜物を持ち優れた人格的影響はあったが、実際の機構・組織がなかったためにアテネの学校は存続することができなかったと言う。それでもなお、哲学の光を投げ掛け人々の思想を呼び覚ましながら‘Personal Influence’というギリシャ人の教育的理想は確実にヨーロッパ各地に広がっていき、大学に生命を与え続けていったのである⁽⁵³⁾。

以上見てきたように、大学をその起源から辿った場合、「人格的影響」が大学発生の原点にあるというニューマンの主張は理解されたが、その理念を実際に実現させ、また大学を存続させていくために、教授制度（Professorial System）と個人教授制度（Tutorial System）との両者が相俟ってはじめて理想である Influence と Law との調和が保てるのだとニューマンは考えるのである⁽⁵⁴⁾。大学は普遍的知識の学びの場ではあっても、すべての学科を提供できるわけではないし、学生もすべてを学ぶわけではない。従って、オクスフォードの大学で行われているような、ともに学寮に住む教授と学生の接触がいかに大切であり、また学生同志の接触がどれほど意味深いものであるか、ニューマンは大学共同体における相互の人格的影響を大きく評価しているのである。紙数の都合でこの問題をここでとりあげることができないが、他の機会に論じたいと思う。

最後に、「人格的影響」に伴うマイナスの面、つまり人間的な弱さの問題についてもいくらか言及しておきたい。卓越した知識と深遠な学識で多くの若者たちを惹きつけ、その雄弁によって若者の心を燃え立たせる教授たちにも、そしてまた、そのような教授に惹かれて集まってくる学生たちの側にも、ある種の誘惑と同時に大きな落とし穴があることにニューマンは我々の注意を喚起していることである。教

える側の知的な驕りは言うまでもなく、誇張しすぎて正道を外れてしまうこと、雄弁によって学生たちを誤った方向に導いてしまうこと、人々から受ける賞賛のために得意になって名声に酔いしれてしまうことなど、教師にとって決して少なくない誘惑である。また聞く学生の側においては、教師に容易に惹きつけられてしまうことなどにも危険の一つがある。ニューマンはかのアベラールの例をあげて、こうした誘惑と人間的な弱さについてかなりのスペースを割いて興味深く叙述している。また、教授同志が互いに敵対し、反目し、時には口論し合って大学の平和を掻き乱すことのあることをも、現実的で冷めた目をもって描き、歴史上に起ったそうした実例も挙げているのである⁽⁵⁵⁾。

おわりに

以上、ニューマンは人間のなかに本来ある知への渇きと、それを癒す機会とは人格的な出会いとその影響を媒介にして実現されるとし、人格的影響が大学発生の原点にあると見ていることを見てきた。ニューマンは人格的影響こそが大学の生命であることを強調していた。大学の知的（また心理的）雰囲気も主として大学を生かす生命である人格に由来しているものであり、過去と現在における教師と学生を、学生同志を、人と人とを結びつけるのは他ならぬ人格に由来するとしていた。もし大学が人格に由来し、人格が大学を生かす魂であるとするならば、大学それ自体ももう一つの人格、あるいは擬似人格(quasi-personality)と言えないであろうか⁽⁵⁶⁾。ニューマンはこれは大学が Alma Mater と称されるゆえんでもあると言う⁽⁵⁷⁾。

最後に、本稿では直接触れることは出来なかったが、ニューマンは大学本来の目的を Liberal Education であるとしながらも、科学的・職業的教育を決して軽んじてはいなかったことにも言及しておかねばならない。事実、ニューマンの設立したカトリック大学の医学部はアイルランドの社会に大いに貢献したし、優秀な理工学部の創設が極めて重要なこととされ、前例のなかった建築学部や農学部の設立もこの大学に予定されていたのであった。また、ニューマンの教育論においてももう一つ重要なこととされる、信仰と理性の問題にも多少言及しておきたい。当然のことながら、教育における理性の重要性はくり返し力説されているが、理性はそれだけでは決して充分ではないことも同じく強調されていることである。理性を至高なものとしたとき、人間は畏れと謙遜を知らないものとなり、道徳が良心に置き換えられてしまう危険性がある。そして道徳が人間行動の最高の規範になったとき、神は見失われ人間の徳も表面的なものになってしまう。そこには真の意味での人間の発達と完成があり得るだろうかとニューマンは問い、『大学の理念』(The Idea of a University) の最後の講義では宗教による影響が不可欠であることを明確に述べている。宗教(教会)が Liberal Education に属する人間や科学の領域に踏み込まないよう注意しなければならないことは言を俟たないが、それと同様に Liberal Knowledge も哲学を啓示と良心の代用にしてしまうことのないようニューマンは警告している。確かに大学は、アテネにおいてそうであったように Liberal Education によって知性を高め判断力を養い、高潔な趣味をもった所謂‘gentleman’をつくりだす事は出来るであろう。しかし、恩寵の働きがない限り、誰も人間を真実な人間としてめざめさせ内面から変容させ得ないことをニューマンは心底確信していたのである。そして、人の心に働きかける目に見えない上からの恩寵の働きがなければ人格的影響も単なる表面的な人間的影響に過ぎないことは前稿『カリスタ』の末尾で述べた通りである。一目見ただけであってもその人の人格の深みに決定的な変化をもたらすような影響は、人間的な次元を超えた両者の内面にひそやかに働く恩寵の影響にはかならないというニューマンの確信は、彼自身の多くの著述から明らかである。

NOTES

1. こうした事情については、カトリック教会の今日的な立場から様々に問い直されている。e.g.: G. W. Ruther, “Newman’s Idea of a Catholic University”, *Newman Today* vol. 1 (San Francisco, Ignatius Press, 1989).
2. 普遍性をもつ古典とすることに反論もある。See: e.g. Fergal McGrath, S. J., *Newman’s University, Ideal*

and Reality (London, Longman and Co., 1951); J. M. Roberts, "The Idea of a University Revisited", *Newman after a Hundred Years* (Clarendon Press, Oxford, 1990).

3. ニューマンは歴史には素人であると言われ、その内容に関しても様々に意見が分かれるが、彼の歴史的な叙述は物語としても大いに興味深い。また歴史上の人物描写について、歴史家には不満があるかもしれないが、ニューマンの意図は人物の外見ではなく精神を描くことであった。See: Charles Frederick Harrold, *John Henry Newman: An Expository and Critical Study of His Mind, Thought and Art*, (Archon Books, Hamden, Connecticut, 1966), p. 223~225.
4. 教育は直接社会に働きかけるのではないが、教育された個人 (individuals) によって社会に影響を与えるというニューマンの考えはしばしば指摘される。しかし、彼の教育論の根底には「人格」(person) が意識されている。
5. J. H. Newman, *Historical Sketches* vol. 3 (Christian Classics INC. Westminster, Md. 1970), p. 6. 本書は Longman 社の1872年版の復刻である。本稿の引用は全てこの書からであり、略号を HS とする。
6. HS p. 7.
7. HS pp. 12~13.
8. HS p. 6.
9. HS p. 8.
10. HS pp. 8~10.
11. Wilfrid Ward, *Problems and Persons*, (Boofd got Libtstird Press, Free-port, N. Y., 1968) Essay Index Reprint Series, 1903. p. 265.
12. HS p. 186.
13. HS p. 8.
14. HS pp. 7~8. マタイ福音書13: 45参照。
15. HS pp. 15~17.
16. HS pp. 13, 14. See also: pp. 18~22.
17. See HS Chapter III.
18. HS p. 18.
19. See: Ibid., Chapter IV.
20. HS pp. 33~34.
21. HS p. 41.
22. HS pp. 41~42.
23. HS p. 42.
24. Ibid.
25. HS p. 53.
26. (c. 481~411B. C.) プロタゴラスの後輩のソフィストとしてプラトンの対話篇『大ヒippias』と『小ヒippias』に登場。
27. ヒippiasと同時代のソフィスト。
28. HS p. 54.
29. HS pp. 42~43.
30. HS p. 136.
31. HS p. 51.
32. HS p. 43.
33. HS p. 48.
34. HS p. 75.
35. Ibid.
36. HS p. 76.
37. HS p. 77.
38. HS pp. 77~78.
39. HS p. 78.

40. University Subjects のなかで、その重要性がのべられている。

41. HS p. 74.

42. HS p. 79. 拙稿『カリスタ』参照。

43. HS pp. 79～80.

44. HS p. 80.

45. Ibid.

46. HS p. 81.

47. Ibid.

48. HS p. 83.

49. HS p. 86.

50. HS pp. 87～88.

51. HS p. 85.

52. HS p. 82.

53. HS pp. 82～84.

54. Ibid., See also : HS Chapter XV.

55. HS p. 185. See also : HS Chapter XVI.

56. Ward, op. cit., p. 271.

57. HS p. 16, p. 23.

(1995年11月22日受理)